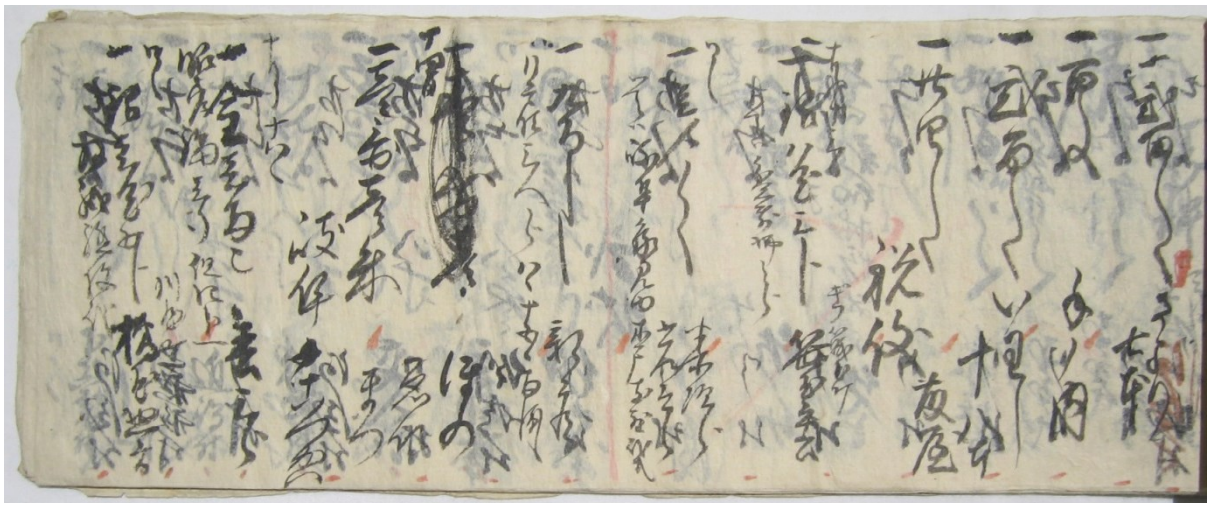
岐阜大学 地域科学部 地域資料・情報センター

地域史料通信 第 11 号

2020. 3



一■弐百文　さより
一百文　七本
一弐百文　手之内
一廿四文　いわし
十八本
藤屋
祝儀
十月十三日　ギフ靱屋町
一銀八匁三分　笹屋平六
是ハ盆前之払之分
同日
一壱貫八文　泰次郎
光太郎
是ハ岐阜象見物木戸支度代共
一九百文　新蔵
日雇三人分八日十五日両渡候
■■■■　ほの
十四日　ゑい
一壱歩壱朱　まつ
岐阜■こつかい
十月十八日
一金壱両也　松三郎
脇差鐺壱ツ　但四分一
同日　川屋町
一銀一匁五分　樽屋惣三郎
羽織縫紋代

（岐阜大学教育学部郷土博物館所蔵　美濃国方県郡河渡村村木家文書ぬ53、以下、特に所蔵を明記していない古文書は、教育学部郷土博物館のものです。上記、解読文の■は、書き損じた文字を表しています。）

上の写真は、方県郡河渡村（中山道河渡宿が所在、現岐阜市内）の庄屋を務めた村木家に残されていた古文書の一部です。表紙に「丑之当座帳」とあり、元治 2 年（1865 年 4 月に慶応元年に改元）の村木家の日々の支出入を記した家計簿のようなものです。この年の 10 月 13 日の支出として（写真中央、日付は「同日」と記載）、「一　壱貫八文　泰次郎・光太郎　是ハ岐阜象見物木戸支度代共」と記されていました（この古文書は、一度利用した紙の裏を再利用しています）。

幕末の岐阜で、ゾウ見物が行われていたようです。

詳しくは2ページから

目　次

ゾウを見に行ってきます！―慶応元年、岐阜の象興行 2
ゾウの輸送について 6
交流コラム／地域資料・情報センターの活動／編集後記 8

ゾウを見に行ってきます！ ―慶応元年、岐阜の象興行―

岐阜にゾウ？

2018年、岐阜市歴史博物館の学芸員の方から相談を受けました。慶応元年（1865）の古文書に「象」という文字が見えますが、岐阜にゾウが来ていたのでしょうか？ 半信半疑ながら古文書を見せていただくと、表紙に「象陸揚差入組入用取調帳」「湊庭銭差入組入用割賦帳」という記載がある、横長の帳面を幾つか綴ったものでした。その後の調査により、慶応元年（1865）10月7日夜、長良川左岸に位置する鏡島湊（岐阜市）でゾウを陸揚げした際にトラブルが発生し、その解決を図るための費用などが書き付けられていることが判明しました。（社本沙也香「岐阜にゾウがやってきた～幕末における見世物興行と長良川輸送に関する一考察～」『岐阜市歴史博物館研究紀要』第24号2、2019年）。

上記の問い合わせをきっかけに、鏡島湊に陸揚げされたゾウはどこからきたのか、なぜ岐阜にきたのか、岐阜で何をしたのかなど、調査を始めました。同時に、岐阜大学教育学部の郷土博物館が所蔵する約5万点以上の岐阜県内の古文書に、ゾウに関する記述がないか、探していきました。慶応元年（1865＝元治2年）という年代に注目して目録を見て、古文書を確認していきました。

結果、鏡島湊に陸揚げされたゾウは、同年10月13日～19日頃にかけて岐阜町（岐阜市）で見世物となっていたことが明らかとなりました（詳細は後述）。

文久期のゾウについて

江戸時代のゾウと言いますと、享保14年（1729）に徳川8代将軍吉宗の命により長崎から江戸へ向かった享保のゾウが有名です（豊橋市二川宿本陣資料館編『動物の旅～ゾウとラクダ～』1999年、和田実『享保十四年、象、江戸へゆく』岩田書院、2015年）。このゾウは、京都から中山道を使い、途中の垂井宿（岐阜県不破郡垂井町）から美濃路へ入り、東海道宮宿（愛知県名古屋市）を通って江戸へ進んでいきましたので、岐阜町には来ていません。

幕末の日本に来たゾウに関して、はじめは詳細がわかりませんでしたが、文久年間（1861～1864）に、アメリカ船によって開港後の横浜（神奈川県横浜市）にマラッカ産のゾウが運ばれていたことが判明しました。開港後の横浜には、ゾウやトラ、ラクダといった動物が運ばれ、江戸などで見世物が盛んになりました。異国の動物に接する機会は限られており、珍しい動物を見ることで御利益が得られると謳われていました（川添裕『江戸の見世物』岩波書店、2000年、国立民族学博物館編『見世物大博覧会』2016年）。

文久3年（1863）、江戸両国（東京都中央区）で、ゾウの見世物興行が行われ、錦絵など様々な印刷物が作られました。ゾウは仏教や儒教で神聖な動物と認識され、錦絵には、ゾウを一度見ると難を除き招福をもたらすという宣伝文があるものもありました（前掲・川添著書、長崎歴史文化博物館編『珍獣？霊獣？ゾウが来た！～ふしぎでめずらしい象の展覧会～』2012年）。

鳥屋熊吉と見世物興行

この頃、動物の見世物興行に関わっていた人物に伊勢国松坂出身（三重県松阪市）の鳥屋熊吉がいます。横浜に来たゾウは、江戸で見世物となった後、鳥屋熊吉に購入され、明治7年（1874）まで各地を巡りました。鳥屋は見世物だけではなく、曲芸や歌舞伎の興行も手掛けていました。明治18年（1885）からは、「鳥熊芝居」と称された革新的な興行により人気を博しました（川添裕「勢州松坂　鳥屋熊吉（上）」『歌舞伎 研究と批評』27号、2001年、服部幸雄『歌舞伎の原郷 地芝居と都市の芝居小屋』吉川弘文館、2007年）。

慶応元年（1865）5月、美濃国大垣（岐阜県大垣市）でトラの見世物があったことが、最近明らかになりました（前掲・社本論文）。この頃、トラの見世物を行っていたのは、鳥屋熊吉です。大垣のトラは、鳥屋の差配であったと思われ、岐阜町のゾウも、彼の関与が考えられます。そこで、鳥屋熊吉の興行年表を、現段階で可能な範囲で作成してみました（①前掲・川添論文、②名古屋市博物館編『特別展 盛り場―祭り・見世物・大道芸―図録』名古屋市博物館、2002年、③『国立歴史民俗博物館資料目録[9]見世物関係資料コレクション目録』国立歴史民俗博物館、2010年、④見世物興行年表 blog.livedoor.jp/misemono/ 2020年2月29日最終閲覧、①～④は、3ページ表と対応）。

年表を見ますと、鳥屋熊吉は、元治元年（1864）

鳥屋熊吉関連の興行年表　（文久2年～慶応3年まで）

年代	月日	場所	現在地	動物	木戸銭	出　典	備　考
文久2 (1862)		勢州 松坂 龍泉寺	三重県 松阪市	虎		上野益三・北村四郎監修、山本溪愚筆『本草写生図譜⑥獣・鳥禽Ⅱ』雄渾社、1982年	虎の写生図（仰視・左右掌・閉眼） あり
	閏8月末より	若宮 八幡宮 境内	愛知県 名古屋市	虎 唐鳥	虎：48文 （中銭8文） 唐鳥：25文	名古屋市教育委員会編『名古屋叢書第二十一巻 随筆編（四）』（名古屋市教育委員会、1961年）所収、細野要斎「感興漫筆 卅」、参考②	幟に「大とら鳥熊丈へ」と題あり
文久3 (1863)	正月2日より	難波 新地	大阪府 大阪市	虎		大阪市史編纂所編『大阪市史史料第二輯　近来年代記（下）』大阪史料調査会、1980年、参考④	「大生虎　太夫元　勢州松坂　鳥熊」
	4月中旬より			虎・鳥	虎・鳥：64文		「異国の名鳥」
				鳥		参考①、④	歌川国員画「紅毛渡り名鳥　太夫元　勢州松坂　鳥屋熊吉」
元治元 (1864)	12月29日より	伊勢 古市町	三重県 伊勢市	虎 インコ	大人：1匁5分 子供：1匁	吉田暎二編『新補伊勢歌舞伎年代記』放下房書屋、1933年、参考①、④	古市町小川屋敷跡で江戸より来た虎の見世物あり、初日は珍しさで見物人が群集、翌年4月上旬まで興行
慶応元 (1865)	4月中旬より	松阪 あたご 山境内	三重県 松阪市	象		参考①、④	引札「太夫元 松阪 鳥屋熊吉・酒楽屋月亭、名代豆腐屋寅吉」
	4月	伊勢 古市	三重県 伊勢市	象		上野益三・北村四郎監修、山本溪愚筆『本草写生図譜⑥獣・鳥禽Ⅱ』雄渾社、1982年	象の写生図あり
	5月1日より					吉田暎二編『新補伊勢歌舞伎年代記』放下房書屋、1933年	右小屋（古市町小川屋敷跡）の跡へ江戸より象来る、木戸札は虎と似たようなもの、5月20日まで興行
	5月14日					『東京大学史料編纂所所蔵版　維新史料綱要』6、東京大学出版会、1943年（1966年復刻）	所司代に命令し、以後は異獣（象）を神宮領内に入れることを禁止する
						参考①、④	引札「太夫元 松阪 鳥屋熊吉、世話人松前屋弥平治・三島屋吉五郎」
慶応2 (1866)	1月8日より	難波 新地	大阪府 大阪市	象	72文 くり上銭16文	大阪市史編纂所編『大阪市史史料第二輯　近来年代記（下）』大阪史料調査会、1980年、参考④	「大生象　勢州松坂　鳥熊」、日々に200貫計りあり
	1月頃より			虎	24文		「生虎」
	4月			象		上野益三・北村四郎監修、山本溪愚筆『本草写生図譜⑥獣・鳥禽Ⅱ』雄渾社、1982年	象の写生図あり
	9月10日より	金沢卯辰観音院境内丸山茶屋の下	石川県 金沢市	象 虎 駱駝 駑馬	象：大札200文 小札150文 虎・駱駄・駑馬： 大札200文 小札150文 4疋共：大札400文・小札300文	若林喜三郎編『梅田日記―幕末金沢町民生活風物誌―』北国出版社、1970年	大坂表より船で積み下げ、8月20日頃に金石浦へ着船
慶応3 (1867)	11月上旬	二軒屋町	徳島県	象		参考①・③・④	象見世物引札「太夫元 松阪 鳥屋熊吉」

※虎は文久元年（1861）にオランダ人が横浜にもたらし、同年10月に江戸麹町、福寿院境内で見世物とされた。その後、鳥屋熊吉が虎を入手した。川添氏は、現時点で確認できる鳥屋熊吉の最初の興行は、文久3年（1863）難波新地の虎の見世物とされるが、「これ以前にも興行履歴があって不思議ではない」とする（参考①）。文久2年（1862）、名古屋若宮八幡宮での虎の見世物と鳥屋熊吉との関係は、あまり知られていないと思われる。詳細は、別稿に期したい。

末～慶応元年（1865）5月にかけて、伊勢国愛宕や古市（三重県松阪市・伊勢市）で、トラやゾウの見世物を行っていました。その後、彼は10月に岐阜町で興行を行い、慶応2年（1866）1月8日から、難波新地（大阪府大阪市）で、ゾウ・トラの見世物興行を催していました。

なぜ、岐阜町へやって来たのでしょうか。

伊勢神宮と見世物興行

伊勢国での興行は、元治元年（1864）の年末から古市町でトラとインコなどの見世物で始まり、初日は珍しさで見物人がたくさん集まっていました（3ページ表）。トラの場合は、観客の前で餌（えさ）となる肉を与え、食べる姿を見物させていました（川添裕「舶来動物と見世物」中澤克昭編『人と動物の日本史 2 歴史の中の動物たち』吉川弘文館、2009 年）。この行為が、興行が始まってひと月も経たない頃、伊勢神宮の神官たちの間で問題となっていました。

神宮領内で獣肉（禁忌に関わる食べ物）を食べさせること、その動物を見せている行為は容認不可とする意見が出たようです。見世物興行は、山田奉行（江戸幕府の遠国奉行のひとつ）から、許可を得ていました。神官たちは、見世物自体の停止は難しいと考え、見世物小屋が参道筋から見えないよう板囲いをすることを山田奉行所に出願しました。トラの見世物は、慶応元年（1865）の4月上旬まで続いていますので、板囲いをすることで継続できたと思われます。

ゾウに関しても2月初めに、神官たちは山田奉行所へ、次のように答えました。ゾウは異国の獣ですが、獣肉（禁忌に関わる食べ物）は用いず藁を食料とするため差し障りはないこと、見世物小屋が参道筋にあるのでトラと同様に板囲いはすること、という見解です。しかし、5月1日より始まったゾウの興行に対して、朝廷から「不容易」という判断が下されます。

朝廷では、攘夷思想を背景として、異国人を穢（けが）れた存在と認識していました。神領内での異国の獣（ゾウ・トラなどの舶来動物）の見世物は、肉食の有無とは関係なく、今後禁止するという内容が、伊勢神宮に伝えられました。（塚本明「幕末異国人情報と伊勢神宮」同著『近世伊勢神宮領の触穢観念と被差別民』清文堂、2014 年、初出は 2005 年、以上の伊勢神宮と動物見世物に関しての内容は塚本論文による）。

伊勢でのトラの見世物は約3か月間あり、ゾウも同程度の期間の興行を予定していたかもしれませんが、1か月も経たないうちに中止となりました。これが、興行計画にどう影響したのか、現段階で定かではありません。岐阜町での興行は、予定通りかもしれませんが、伊勢での興行が途中で中止となったため急遽催された可能性も考えられます。

どのようにして、ゾウは来たのか？

伊勢国から美濃国へ、ゾウはやって来ましたが、両国の交通はどうだったのでしょうか？

例えば美濃国から江戸へ年貢米を送る場合、米俵は川湊から川船に乗せて、長良川などの河口に位置する伊勢国桑名（三重県桑名市）に集められ、そこから廻船に積み込み江戸へと運ばれていきました（岐阜大学地域科学部地域資料・情報センター編『地域史料通信』第6号、2014 年）。

美濃国の特産品の和紙も、舟運を利用して伊勢国へ運ばれました。美濃和紙は、伊勢型紙の原紙や、伊勢神宮の御師（参宮客に代わり祈祷を行う伊勢神宮の神主。彼らが参宮客を全国から招き、世話をした）が檀家に配布する神札や伊勢暦、また、伊勢神宮外宮の門前町山田で発

明治14年（1881）の長良川の鵜飼船（荷船）一覧 （岐阜市内）

場所	長さ×幅	積載量	行先
厚見郡岐阜町字下新町	9間×7尺3寸 （約16.4×2.2メートル）	積荷3200貫目限り （約12.0トン）	桑名・四日市・名古屋等に往復
方県郡長良村	9間1尺×7尺 （約16.7×2.1メートル）	積荷3400貫目限り （約12.7トン）	桑名・四日市・津・若松・名古屋・知多郡小須賀井等に往復
厚見郡鏡島村	9間4尺×6尺5寸 （約17.6×2.0メートル）	積荷3400貫目限り （約12.7トン）	桑名・四日市・名古屋等に往復
厚見郡加納村字長刀堀	9間1尺×9尺 （約16.7×2.7メートル）	積荷3000貫～600目限り （約11.2～2トン）	桑名・四日市・名古屋等に往復
方県郡福光村字紺屋	9間2尺×7尺4寸 （約17.0×2.2メートル）	積荷2870貫目限り （約10.7トン）	桑名・四日市・名古屋・常滑村等に往復

※岐阜市編『岐阜市史 史料編近代一』1977年、第3部文書102「明治十四年 現岐阜市関係地域の渡船場・乗客船・荷船」より作成

行・流通した紙幣の山田羽書などに用いられました。（岐阜市歴史博物館『企画展 美濃和紙』1987 年、藤井典子「幕府による山田羽書の製造管理」『金融研究』31-2、2012 年、伊勢市編『伊勢市史 第三巻近世編』2013 年）。

伊勢国からは、塩や干鰯などの肥料が廻船を使って桑名・四日市（三重県四日市市）に集積され、川船で長良川をさかのぼり、鏡島湊に荷揚げされ、陸路で各地へ運ばれていきました（『岐阜市史 通史編近世』1981 年、岐阜県博物館編『川に生きる～水運と漁労～』岐阜県博物館友の会、1994 年）。物資のほか、美濃国内で伊勢の御師が活躍しており、彼らが檀家に土産として配った伊勢暦が、美濃国の庄屋を務めた家に残されていたりします（岐阜大学地域科学部地域資料・情報センター編『美濃国方県郡河渡村村木家文書目録』）。

以上の通り、伊勢・美濃両国は水上交通で結ばれていましたが、ゾウは川船に乗れたのでしょうか。

長良川を物資の輸送で航行した川船は、鵜飼船と呼ばれる、舳（へさき）と艫（とも）が同じ形をした細長い船です。14 代将軍徳川家茂の上洛に伴い、文久 2 年（1862）、美濃・伊勢両国の村々の船数の取調べが行われました。鵜飼船には大鵜飼船（24 人乗、水主 3 人）・中鵜飼船（15 人乗、水主 3 人）・小鵜飼船（10 人乗、水主 2 人）の 3 種類がありました。この中で最も大型の大鵜飼船は、長さは 7 間～9 間 2 尺（約 12.7～17.0m）、巾は 5 尺～8 尺（約 1.5～2.4m）ありました（美濃郡代笠松陣屋堤方役所文書「文久二年戌六月 御上洛御用留」岐阜県歴史資料館所蔵）。

鵜飼船の航行範囲については、明治 14 年（1881）の資料が参考になります。大鵜飼船は、岐阜町・長良村・鏡島村・加納村・福光村にあり、桑名や四日市などの間を往復し、最大の積載量は約 12.7 トンありました。輸送されたゾウの重さは 800 貫（約 3 トン）だったので、幕末に同じ大きさの船があれば、輸送は十分可能と考えられます（前掲・社本論文）。

岐阜大学所蔵の古文書にみるゾウ

慶応元年（1865）10 月、岐阜町にやって来たゾウの見世物興行が始まりました。その場所は不明ですが、当時の盛り場であった伊奈波神社前か、美江寺観音前のどちらかと考えられています（前掲・社本論文）。岐阜大学教育学部郷土博物館が所蔵する古文書で、ゾウ見物に関わる記述について、抽出しました。

【１】河渡村の庄屋、村木家に残された帳簿

（表紙）「丑之当座帳」※1 ページ表紙の画像と同じ古文書

十八日分

一　弐百四拾八文　　象幷力持

　　外百六拾四文　　木戸

　　支度代

（美濃国方県郡河渡村村木家文書ぬ 53 の一部を抜粋）

【２】河渡村の庄屋、村木家に残された日記

（表紙）「諸用細日記」

十三日　晴　□□□□又七・定次郎・拙・光太郎等、岐阜へ象見物参り、丸屋ニ而支度致し、端銭□□□□又七届ニ□、木戸力持共又七引請ニ而夫ゟ所々珍し、夜ニ入引取候（以下、略）

十四日　晴　家内不残、岐阜へ象見物ニ参候（以下、略）

（美濃国方県郡河渡村村木家文書ぬ 104 の一部を抜粋）

【３】高屋村の庄屋、古田家に残された帳簿

（表紙）「慶応元年乙丑年寅年迄調書覚

　　金銀小銭出入諸日記覚帳　　」

同十九日

一　同壱貫九百五拾弐文

　岐阜江ぞうみの共、雑用二人下女壱人、〆三人之入用、

　是ハ手前ニ取替置

（美濃国本巣郡高屋村古田家文書ぬ 663 の一部を抜粋）

上記の記述から、見世物興行は、10 月 13 日～19 日の間には開催されていたこと、ゾウの他に力持（重量のあるものを持ち上げて力を見せる人）の見世物が行われたことが判明しました。はじめに記した「湊庭銭差入組入用割賦帳」には、「当十月勢州路より象一疋幷力持諸道具積登り」という記載がありました（前掲・社本論文）。ここから、力持は道具を使った芸を行っていたと思われます。

また、木戸代（入場料）が、ほかよりも高値であったことが確認できました。

慶応 2 年（1866）の難波新地でのゾウの見世物の場合、入場料 72 文と小屋内での追加徴収分 16 文で、合わせて 88 文でした。トラ・鳥の木戸銭の場合、文久年間は、おおよそ 60～80 文くらいでした（3 ページ表参照）。

10 月 13 日の岐阜町のゾウ見物で、河渡村の泰次郎と光太郎の二人は、木戸・支度代として 1 貫 8 文の支払いをしていました（1 ページ表紙）。河渡村から岐阜

町へ行くまでの費用も含め、一人あたり 504 文の支出となります。

また、古田家の帳簿からも、雑用 1 人と下女 1 人の計 3 人の入用で、1 貫 952 文の支払いとあります。一人あたりでは、約 650 文となり、高屋村から岐阜町へ行くまでの費用も含めても、かなりの高額です。

慶応 2 年（1866）、金沢（石川県金沢市）で動物の見世物興行が行われました。ここでは、ゾウのみの木戸銭は 200 文で、ほかの動物も含めた場合は 400 文となっていました。金沢と岐阜町の木戸銭は、大坂よりも高額となっていますが、理由は判然としません。

岐阜町でのゾウの見世物には、大垣や起宿（愛知県一宮市）からも見物人が来ていた可能性があります。大垣で代々藩医を務めた江馬家に、ゾウの見世物チラシが残されています。美濃路の宿場、起宿の脇本陣を務めた人物は、ゾウを題材に和歌を詠んでいました（8 ページ「現場から」参照、一宮市尾西歴史民俗資料館『秋季特別展 公儀御用の象、美濃路をゆく』2019 年）。また、近隣の旗本も、ゾウを見に来ていたかもしれません（各務原市の学芸員の方からの御教示より）。

今まで知られていなかった岐阜に来たゾウについて、今後もほかの古文書などが見つかる可能性があります。一見しただけでは訳がわからないものにも、歴史の一記録が詰まっています。今後も調査を継続したいと思います。

（地域科学部　地域資料・情報センター　中尾喜代美）

ゾウの輸送について

Q．幕末のチラシによれば、日本に来たゾウは雌で、当時 3 歳といわれています。岐阜にやってきたときは、5 歳になっていたようで、鼻の長さ 6 尺 5 寸（約 2.0 m）、胴の長さ 1 丈（約 3.0 m）、胴廻り 2 丈 3 尺（約 7.0 m）、背の高さ 7 尺（約 2.1 m）、足の長さ 3 尺 2 寸（約 1.0 m）で、重さは 800 貫（約 3 トン）ありました（岐阜県歴史資料館寄託 江馬寿美子家文書「瓦版 大象」）。**マラッカから来たと言われていますが、実際のアジアゾウの特徴は？**

マレー半島側の大陸に分布するゾウはより大型、島嶼（ボルネオ島やスマトラ島など）に分布するゾウは多少小型です。当時輸入された 5 歳の雌の体高が約 2.1 m、体重が約 3 トンという情報が正しいとすれば、標準よりもかなり大型です。しかし、5 歳というのは甚だ疑わしく思えます。

2017 年に札幌市円山動物園にミャンマーからアジアゾウ 4 頭が贈られましたが、この中の雌（2013 年 5 月生）の 6 歳時点で 1665 kg（2019 年 9 月計測）でした。図 1 から考えると、5 歳であれば平均 1 トン程度。しかし体高が 7 尺もあったことを考えれば 2 トン弱くらいかもしれません。

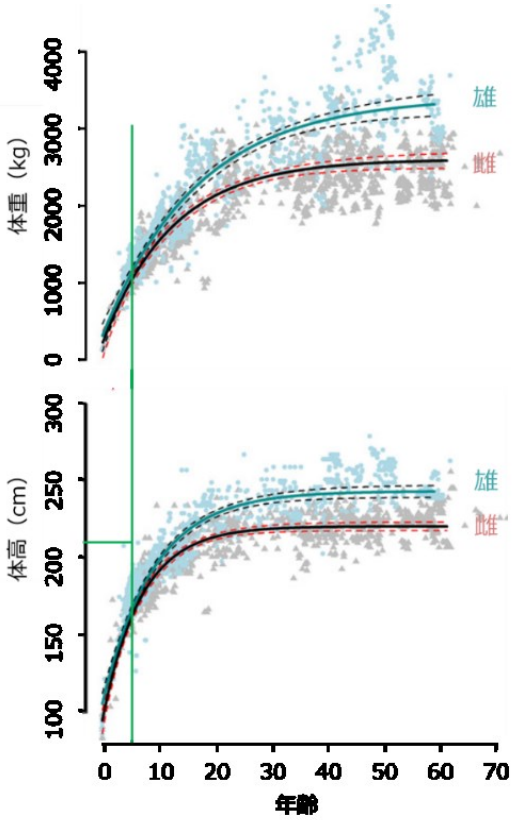


図 1　ミャンマーの雌雄アジアゾウにおける体重と体高（Chapman SN et al. 2016. How big is it really? Assessing the efficacy of indirect estimates of body size in Asian elephants. PLoS ONE 11(3) より一部抜粋，改変）

図２　円山動物園のアジアゾウ（左が当時６歳の雌）

図３　動物園内でのトラックからトレーラーへの輸送箱の積み替え（写真はアフリカゾウの輸送時、2006年撮影）

Q．ゾウは、狭い船（鵜飼船）におとなしく長時間も乗れるのでしょうか？

海外からの現代の輸送方法としては、専用の輸送箱に１頭ずついれ、通常は貨物専用機（や貨物船）などを使い、現地から空港、また日本に到着してから動物園までは大型のトラックやトレーラーを使うことになります。ゾウが大きく輸送箱が大きければ、低床トレーラーや大型のクレーン車も必要になります。ゾウの輸送の馴れの程度によっては、運送中に大きく体を揺らすことがあり、車体に体重分以上の負荷がかかります。低速走行に加え、休憩を多くとりながら、同伴者による声掛けなど、十分な観察やケアを行いながら運ばれていきます。

2004年には、岐阜県の河川環境楽園内でのイベントで、千葉県の市原ぞうの国からアジアゾウがやってきたこともありました。アジアゾウはアフリカゾウとは異なり、原産国では使役や世界的にもサーカスなどに使われてきた歴史があり、ゾウ使いや飼育者などとの関係性やハズバンダリートレーニングの程度によって、ゾウへの負担を少なく輸送することも可能です。当時の鵜飼船内での状況を伺い知ることはできませんが、現代でもそれに代わる輸送が行われているため、当時からゾウの習性などを理解した上で運ばれていたことを想像します（日本に到着してからは、当時としては不馴れな日本人がどのように扱っていたかは疑問ですが…）。

図２　京都市動物園にラオスから贈られたアジアゾウの輸送箱の実物

Q．いまのアジアゾウの現状を教えてください。

日本でのゾウの飼育の歴史は古く、江戸時代などの古い情報も明らかになりつつあります。当時はすべてがアジアゾウでした。日本の動物園としての飼育の歴史も長く、国内最古の上野動物園開園後に輸入された1888年から、130年以上が経過します。アジアゾウの国内飼育頭数は多いのですが、繁殖成功例は非常に少ない状況です。2000年代に入り、ゾウの飼育体制や輸入時の雌雄別頭数の改善、施設整備や群れ飼育などが推進され、また動物園間での繁殖目的での移動も増えてきたため、繁殖環境や繁殖例数はそれ以前に比べて劇的に変わってきました。アジアゾウもアフリカゾウも今、絶滅の危機に瀕しているため、繁殖事情をさらに改善していくことが急務です。ゾウの輸送には多くのリスクやコストが伴いますが、十分にトレーニングを行い、個体に対する負担を軽減し、もっと積極的に国内輸送や海外の動物園との輸出入が必要です。いつまでも動物園でゾウと出会えるように。

（応用生物科学部　楠田哲士）

交流コラム～現場から～

《起宿に残る「文久の象」》

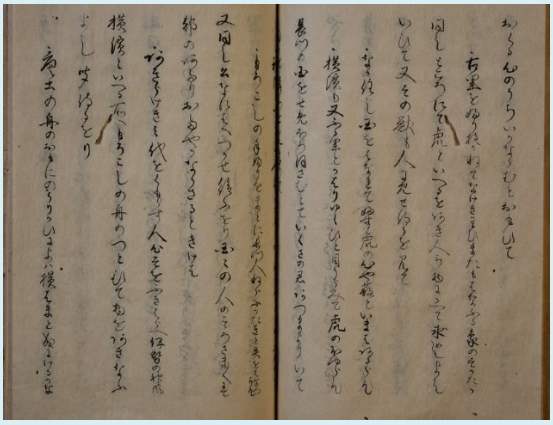
一宮市尾西歴史民俗資料館　宮川充史

当資料館は岐阜県羽島市と隣接する一宮市起にあります。江戸時代には美濃路起宿があり、本陣加藤家、脇本陣・船庄屋林家やその他周辺の庄屋層の資料が多く残され、開館以来、それらを利用して活動してきました。縞木綿の生産や流通、木曽川の水運等、多くの研究成果が発表されてきましたが、未だに新しい発見が展示会や講座の準備過程でみつかります。その一つが江戸時代の象に関わるものです。

江戸時代の象として知られるのが、享保 14 年（1729）に将軍吉宗に送られた象です。美濃路での旅の様子は起宿本陣加藤家が書き留めた「覚書之事」（『尾西市史』資料編 1）に詳しく記され、既に多くの書籍にも紹介されています。その約 130 年後の文久 3 年（1863）にも日本に上陸しています。この象は「御用象」である享保の象と異なり、興行目的の象で、横浜や江戸、伊勢での興行が知られています。慶応元年（1865）にはこの象が岐阜に来たことや、大垣で虎の興行も行われたことが、近年明らかになり、岐阜周辺の村々からも史料が見つかりました。

起宿脇本陣を務めていた林家の文書の中にも象や虎に関わる史料がありました。和歌に精通していた林浅右衛門（通贇）は、日々の出来事等を題材に和歌を作っています。象や虎が来た慶応元年は将軍徳川家茂の進発について詠まれた和歌が何点かあり、その中に象や虎を詠んだ和歌がありました。その真意はわかりませんでしたが、岐阜に象や大垣に虎が興行に来ていたことがわかり、浅右衛門の和歌もこれらの象や虎を詠んでいるものと考えられます。

（一宮市尾西歴史民俗資料館　℡0586-62-9711）



通贇自詠歳々和歌合集（林家文書）
※２行目に「古里をふり捨かねてなけきわひ
またもはなふる象のすかたか」とあります。

※「交流コラム～現場から～」では、岐阜県に関わる史料の編纂・保存・活用事業や、史料展示などの情報を掲載していきます。皆様からの情報をお待ちしています。

地域資料・情報センターの活動

岐阜県に関係[redacted]る資料の収集や整理をおこなっています。最近はＦＢを通じて情報を発信しています（https://www.facebook.com/岐阜大学-地域資料情報センター--897652480255703/）。岐阜県内での様々な行事などの紹介や、関連する書籍についての案内などをしています。ご興味のある方は、ぜひご覧ください。

編　集　後　記

本号では、幕末に岐阜にやってきたゾウの特集となりました。昨年、ゾウの展覧会を開催されました一宮市尾西歴史民俗資料館の方に御寄稿をお願いしました。また、動物としてのゾウへの理解を深めるため、応用生物科学部の楠田先生にもご協力いただきました。調査・執筆にあたり、御協力いただいた多くの方に感謝を申し上げます。　（中尾喜代美）

岐阜大学 地域科学部 地域資料・情報センター　地域史料通信　第 11 号

発　行　日　2020 年 3 月 24 日　　年 1 回刊行（予定）

編集・発行　岐阜大学 地域科学部 地域資料・情報センター／応用生物科学部 動物繁殖学研究室

〒501-1193　岐阜市柳戸 1 番 1　　Tel　(058)293-2312 または 3323　　Fax　(058)293-3324

E-mail　archives@gifu-u.ac.jp　　URL　http://rilc.forest.gifu-u.ac.jp/